

子どもたちの学力向上と進路実現を サポートする活動として、 学校と連携して漢検を実施しています

久喜市立太東中学校

学校運営協議会 委員

渡邊 京子様



コミュニティ・スクール としての活動

久喜市では「地域と一体となって子どもたちを育む」という主旨のもと、今年度（2017年度）から市内の全小中学校をコミュニティ・スクールに指定しました。太東中学区は、ほかの学区に先駆けて学校運営協議会が設置され、昨年度からコミュニティ・スクールとしての活動をスタートさせています。私自身は学区内の「放課後子ども教室」の事業に長く携わっていた経緯もあり、本校がコミュニティ・スクールに指定された際も、学校運営協議会のメンバーに加わるようお誘いをいただきました。コミュニティ・スクールに指定されて以来、先生方や地域の皆さんと相談しながら企画を練り、さまざまな活動に取り組んできました。地域の方々と生徒とで「**剪定隊**」を組織して一緒に植栽の管理を行う活動や、マラソンランナー川内優輝選手の弟で、ご自身もランナーとして活躍中の川内鴻輝選手の指導による「ランニング教室」、それから「働く人々に学ぶ」と題して外部講師の方にお話を伺う進路学習など、学校と地域住民の方を有機的に結びつけるような活動に力を注いでいます。

漢検導入の経緯

地域との連携を図りながら様々な課外活動を行う一方で、コミュニティ・スクール発足当初から、生徒の学習支援・学力向上のための活動もしていきたいと考えていました。具体的に何をすべきか思い悩んでいたのですが、あるイベントをきっかけに数学検定が学校で実施できることを知り、ためにしに団体受検を実施してみることになりました。すると、検定の実施が好評だっただけでなく、保護者の方を中心に「漢検は受検できないのですか」「漢検

も実施してほしい」という声が相次いで寄せられたのです。そこで学校側とも話し合い、漢検も実施することになりました。

導入の決め手となったのは、保護者の方々の要望と、資格としての知名度が高く、高校入試に役立つということです。また、漢字の学習に取り組むことで語彙力や日本語を正しく使う力が身につき、全教科の成績向上が期待できるのではないかと考えました。もちろん学校側とは実現に向けた運営面の問題も検討しました。多忙な先生方の負担を増やすのは現実的に難しいので、学校を会場としてお借りし、運営は私たち学校運営協議会が主導することになりました。学校を会場としたことで、保護者の方からは、受検会場への送迎等の必要もなく、安心して受けさせられると喜びのお声をいただいています。

漢検の実施にあたって

検定日を決めるにあたっては、高校入試に役立てるという目的を最優先し、中学3年生の調査書に間に合う秋の検定日を選びました。また運営の役割分担については、申込書の配布や回収、集金は学校側にお願いし、漢字検定協会への申し込みや会場の準備、そして検定当日の監督などは学校運営協議会のメンバーが担当する形を取っています。現時点では学校の教室を2教室お借りして漢検を行っており、検定当日の監督業務は4人のメンバーでまかなえています。地域と学校の信頼関係が築けているので、漢検の導入に際しても、学校の先生方が私たちの活動をバックアップしてくださっています。年間行事予定にも漢検の日程を掲載していただきましたし、検定日には校長先生と主幹教諭の先生が様子を見にきて、写真を撮影されていました。写真は後日、「学校だより」に掲載してくださったことです。コミュニティ・スクールの活動の一環として、

学校と地域とがしっかりと手を結んで漢検に取り組めていることを、私自身も嬉しく、頼もしく感じています。

漢検導入の効果

今回、多くの生徒が目標級に合格してくれたので、「高校入試を支援したい」という当初の目的は果たせたと思っています。漢検を導入してみてわかったことは、「漢検合格」という明確な目標を設定することで、生徒の勉強へのモチベーションが高まることです。今回、中学卒業レベルの3級だけでなく、高校在学レベルの準2級に挑戦して合格した生徒も多数出て、真剣に検定に取り組んでくれたことを実感しました。「調査書に書ける」というのも学習の励みになるようです。また一方で、わずかながら点数が足りず不合格だった生徒もありますが、これを機会に奮起して再チャレンジしてほしいと思います。やはり、中学3年生は高校入試対策に忙しくなるので、中学1年生のうちからコツコツ受検して、早めに目標級を取得するよう生徒には話しています。

余談ですが、実は今回、学校での実施のほか、私がやっている「学研 はなまる教室」でも漢検を導入しました。そこで、勉強への苦手意識が強かった児童が自分から「漢検を受検する」といって挑戦してくれたのです。学年相当級のひとつ下の級から挑戦することにして、検定までの期間本当に頑張って勉強しました。合格したいという意気込みが、苦手な学習に取り組む動機付けになっているのを感じました。結果については、先日の合否結果発表で見事合格していることがわかり、本人も私も大喜びでした。それだけでなく、これまでなかなか丁寧に字を書けなかった彼が、漢検を受けてから見違えるほどきれいな字を書くようになり、驚きました。子どもにとって「頑張った経験」や「合

格した自信」が、どれほど貴重なものであるかを実感した出来事でした。漢検をきっかけに自信が芽生えた様子の彼をみて、こうした機会をたくさんの子どもたちに提供したいと改めて思いました。

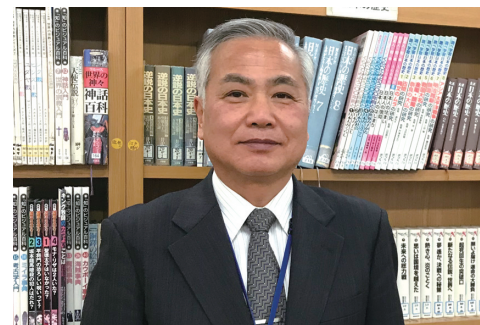
今後の展望

漢検を実施していく中で、今後取り組んでいきたいのは、ひとつは家族受検の促進です。今回は1名だけ大人の受検者がいたのですが、これからは地域にもっと広く呼びかけ、「地域と共にある学校」のイベントとして、生徒だけでなく地域の大人の方にも受検していただけるよう、家族受検のPR活動などを行っていきたいと考えています。そしてもうひとつは、学区内の小学校への展開です。いまの小学校では、運動会などもそうですが、順位や合否を競う機会がずいぶん減っています。そのことの是非はともかく、やはり子どもたちにとって、自分の努力や頑張りが評価や点数という形となって表れることは得難い経験ですし、目標に向かって勉強し、競争心を持って何かに挑戦することは将来への大きな糧になるのではないかと思います。そうした思いもあり、小学校にも漢検導入を図っていけるよう、準備を進めているところです。小学生の保護者からも「通い慣れた学校で受検できるとありがたい」という要望があがっているので、ぜひ実現させたいと思います。

勉強やスポーツが苦手な子にも スポットライトが当たり、自信や意欲が生まれる。 漢検受検が学習意欲や達成感につながっています。

さいたま市立木崎中学校
学校地域連携コーディネーター

中村 秀男 様



チャレンジスクールの活動

さいたま市では、市の教育推進事業として、全小中学校で「放課後チャレンジスクール」を、そして全小中学校で「土曜チャレンジスクール」を実施しています。いずれも、学校と地域とが連携し、一体となって地域の子どもたちを育てるというのが基本的な考え方です。私が関わっている木崎中学校の「土曜チャレンジスクール」も、地域のボランティアの方々によって運営されていて、土曜日に参加を希望する生徒たちの自主的な学習や、基礎学力の向上、学習習慣の定着などの支援をめざしています。チャレンジスクールは、教育課程外の活動ではあるのですが、生徒の学びという観点に立つて考えた場合、学校での学習内容と連動させた支援活動を行っていく必要があります。ですから学校側とは、生徒の普段の様子や学習状況などを密に共有しながら、生徒個々の力に応じた学習サポートを行うよう心がけています。

漢検導入の経緯

漢字検定の団体受検（以下、漢検）を導入した目的は、日頃の漢字学習の習熟度を確認することです。漢検であれば、学年や単元の枠を超えて、漢字を正しく使う力がきちんと身についているかを、全国的な指標で測定することができます。実際に社会に出てからも通用するような、いわゆる「生きた学力」として漢字力が身についているのか、確認できる点がよく考えました。加えて、漢検のよいところは、児童生徒が自分の実力に

応じた目標を決めて、自分のペースで学習に取り組めるところです。漢字は比較的勉強の成果が出やすい分野でもあるので、普段国語の成績がふるわない子でも、ちょっと背伸びした級に挑戦し、合格しておおいに自信をつけたということもありました。やはり、合格が励みになって、これから頑張ろうという気持ちになるようです。また、特別支援学級の生徒も積極的に挑戦してくれています。彼、彼女らの担任の先生も一体となって勉強をサポートしてくださっているそうです。やはり、目標が生まれたからこそ、自分なりに頑張ろうという意欲が芽生えます。そんなふうに生徒たちが自分の学習進度に応じて目標を決め、それに向かってチャレンジしてみるというプロセスを体験できることが、漢検の魅力ではないかと思います。

漢検の実施にあたって

漢検の実施にあたっては、答案用紙の確認や当日の監督など、ほとんどの実務は私たちチャレンジスクールのメンバーが主体となって行っています。加えて、学習面のサポートもできる範囲内で行うようにしています。漢字検定協会が無償で提供してくれている過去問題を受検希望者に配布するなど、生徒の「自学自習」を促すよう努めています。チャレンジスクールに来て、自分で購入した漢検の問題集を解いている生徒もよく見かけます。そうしたことの積み重ねもあって、保護者の方からは「うちの子が家でも熱心に勉強するようになって嬉しい」といった喜びの声をいただいています。嬉しいことに、学校の先生方も熱心に協力してくださっています。なかには漢検に申し込んだ生徒たちを集めて、答案用紙の配布から回収まで、本番の受検の段取

りそのままの進捗で模擬試験を行ってくださっている先生もいます。また、学校と協力しながら漢検を実施する工夫のひとつとして、検定結果は必ず校長先生と担任の先生に目を通してもらうようにしています。そうすることで、受検結果を返却する際に先生からただ黙って渡すだけではなく、合格した子は褒め、不合格だった子は励ましてあげることができます。そういう評価や激励が、次のやる気につながるように感じています。

漢検導入の効果

個々の生徒の学力の習熟度を測ることができ、教科担任の先生がそれを把握してその後の学習に活かせるなど、漢検を導入したことによる効果は少なくありません。そして学力面の効果以上に大きいと思うのは、これまでは勉強やスポーツではあまり目立たなかった子どもたちが、漢検をきっかけに自信をもって前向きな発言するようになったことです。学校があまり好きではなかったり、普段はあまり注目されなかったりする子が、合格して自信をつけ、「次はもっと上の級に挑戦します」などと、いままで見せたことのなかったような笑顔で話す様子を見ると、「誰かに自慢できるものが見つかり、自分を誇りに思えるようになったんだな」と心から嬉しく頼もしく感じます。それまで学校の行事などにはまったく無関心だったのに、4級に合格したのを機に、漢検実施後の教室の片付けを自主的に手伝ってくれるようになった子もいます。勉強もスポーツもあまり得意ではない、そんな子にもちゃんとスポットライトが当たり、達成感や自尊心、そしてさらなる向上心を持つことができる。自信や意欲が生まれるのです。それは何よりの「漢検効果」だと感じます。

今後の展望

今後も継続して漢検を実施し、取り組みの輪が広がるよう、より積極的に生徒に呼びかけていきたいと考えています。そのペースにあるのは「私だってやればできるんだ」という実感を、ひとりでも多くの生徒に味わわせてやりたいという思いです。漢検に合格するためには地道な努力が必要となりますが、漢字というのは、学習の成果が表れやすい分野でもあります。自分なりに精一杯努力さえすれば、必ず「合格」という形となって花開くんだよ、ということを、これからも生徒たちに伝え、ひとりでも多くの生徒が、漢検の受検を自信や誇りにつなげてくれるよう願っています。

受検後の自信にあふれた笑顔を見るにつけ 漢検が子どもたちの成長の 一助となっていることを強く実感します

北区立浮間小学校

わくわく浮間ひろば実行委員長

いな ふね
稲船 千里 様

わくわく浮間ひろばの活動

「わくわく浮間ひろば」は、子どもたちの放課後の居場所づくりを目的とした支援活動で、もともとは15年前に「地域寺子屋事業」として立ち上がりました。2013年より現在の名称に変わり、区の「放課後子ども総合プラン推進事業」の一環として活動を続けています。児童の参加率は非常に高く、今年度（2017年度）は全校児童の約7割が、1年生だけでみると9割以上がこの「わくわく浮間ひろば」に登録しています。登録児童の増加にともなって開催日も少しずつ増え、当初は週に1回だけの開催でしたが、現在では週に6日、学校の長期休暇中も平日は終日開催しています。主な活動としては、子どもたちの放課後の宿題や自習、自由遊びを見守るほか、クッキングや話し方講座などの体験プログラムを不定期に開催したり、ダンス・卓球といったクラブ活動を実施したりしています。運営にあたっては、区の職員さんや児童館の職員さんの応援をいただきながら、私を含めた20名の地域スタッフがシフト制で担当する形を取っています。

漢検を導入したきっかけ

漢字検定の団体受検（以下、漢検）は2014年度から実施しています。前任の校長先生から「漢検をやってみよう」というお話を持ちかけられたのがきっかけでした。国語の教育に力を注いでいらっしゃる、図書ボランティアの方を招いての読み聞かせなども積極的に実践されていました。漢検の導入によって、子どもたちがもっと深く漢字に興味を持つ動機づけになるのではないか、というのが先生のお考えでした。さらに家族団らんの時間に保

護者の方が子どもに漢字のクイズを出題するなど、漢字を通じて家族間のコミュニケーションの促進につながれば、という思いもあったようです。ただ学校が主体となって実施するには、時間の制約など、いろいろと難しい面があり、「わくわく浮間ひろば」の活動の一環として実施したいとご提案をいただきました。一方、私たちも以前から“学力の底上げ”を活動の課題として考えていたため、遊ぶ前に宿題を終えさせる「学習タイム」を設けるなど、子どもたちに学習習慣を身につけさせる試みを行っていました。ただ、指導をするのはプロの先生方ではなく、地域のボランティアの方々です。どのように「学力向上」を進めていけばよいのか、難しさも感じていました。漢検なら合格というゴールがはっきりしていて学習計画が立てやすく、到達度の把握も比較的容易です。ボランティアである私たちでも取り組みやすいのではないかと考え、導入を決めました。実際に始めてみると、漢字の学習は自学自習がしやすく、学習面のサポートも「わくわく浮間ひろば」で充分に行えることがわかりました。具体的には、プリントを渡したり、プレテストを実施するほか、問題集を自由に貸し出せるようにしたりして自主的な学習を支援しています。

漢検の運営について

漢検の具体的な実施方法ですが、受検案内（児童用パンフレット）は学校を通じて全家庭に配布していただき、保護者の方や兄弟の参加も積極的に呼びかけています。申し込みは「わくわく浮間ひろば」の時間内に行い、申込用紙と検定料と引き換えに、その場で領収書を手渡すようにしています。自分で申込用紙を持ってきて、期間内に申し込むというのは、特に低学年の児童にとっては緊張することだと思います。でも、提出物をなくさず、

期限を守って提出するというのも大切な経験です。漢検を導入した当初は、受付期間後の申し込みも「間に合うからいいよ」と受理していましたが、「締め切りを守る」というルールを学ばせることも漢検を実施する意義のひとつではないかと考え、受付期間を過ぎた申し込みは、断るようになっています。検定本番の準備や運営も私たち実行委員のメンバーが中心となって行い、検定当日は1部屋当たり3、4名で試験監督と机間巡視を担っています。毎回メンバーで話し合いながら改善を重ねてきていることもあり、スムーズに運営できていると思います。あえて苦労した点を挙げるとすれば、会場設営でしょうか。漢字で書かれた教室内の掲示物を隠すのが大変で、暗幕を貼ってみたり、テーブルクロスを用いるなど、検定のたびに試行錯誤を繰り返した結果、現在は軽くて使い勝手の良い黒いビニール袋で隠す方法に落ち着いています。そんなふうに漢検は、私たち運営メンバーが知恵を出し合い、結束を固める格好の機会にもなっていると実感しています。

受検後の子どもたちの反応

やはり通い慣れた学校で受検するというのは、保護者の方にとって安心ですし、子どもたちにとってもリラックスしてふだんどおりの力を発揮できる大きな要因になっているように思います。だからでしょうか、検定が終わった後は、どの子どもも充実感にあふれた表情をしていて、「どうだった?」と尋ねると、笑顔でVサインを返してくれる子もいます。ニコニコと笑顔がはじけている子どもたちの表情を見るのは毎回大きな楽しみです。また、実際に毎回たくさんの子が合格証書を手に入れます。合格証書が子どもたちにとって大きな励みになっていると思います。また、兄弟や親子で受検して合格する

と「家族合格表彰状」が授与されます。家族合格をした児童には、全校朝会で校長先生から表彰状が渡され、全校児童からは大きな拍手が送られます。漢検を導入してよかったと思う瞬間でもあります。

今後の展望

いまのところ学校との連携もうまくいっていますし、準備や運営のスタイルも確立できていますので、このままのペースで漢検を続けていきたいと考えています。漢検導入を機に、学校でも漢字ドリルやプリントなどの学習に力を入れていただいており、漢字学習が学校全体の取り組みとして根付きつつあるように感じています。今後は学校とさらに連携を深め、受検の呼びかけや学力向上のための方策など、さまざまな面で協力し工夫しながら、漢検導入の成果をもっと高めていければと思います。「わくわく浮間ひろば」を運営する立場として、つねづね考えているのは、ここが子どもたちにとって放課後の心休まる居場所であってほしいということです。そして親でも先生でもない大人と接することで、学校や家庭では学べないようなことをたくさん吸収し、成長してほしいと願っています。それには、漢検導入による効果も少なくありません。受検後の子どもたちのあの自信満々の笑顔を見るにつけ、漢検が子どもたちの成長を促す一助となっていることを強く感じます。今後もさまざまなアイデアや試みを取り入れながら、子どもたちの成長をしっかり見守っていきたいと考えています。

地域協働学校主導の 学習サポート活動として 漢検を導入しています

新宿区立淀橋第四小学校
地域協働学校運営協議会
佐藤 文子 様



地域協働学校の 4つのサポート

本校は、地域の住民・保護者・教職員などで構成する「地域協働学校運営協議会」を設置した小学校として、2014年に区の「地域協働学校」の指定を受けました。子どもたちの支援・育成を図るため、地域と学校とのパイプ役となって、子どもたちが勉強に打ち込みやすい環境づくりに寄与し、かつ多忙な先生方の負担を軽減するのが私たちの役割だと考えています。地域協働学校運営協議会のメンバーは私を含めて10名で、主に「学びのサポート」「みどりのサポート」「安全サポート」「読書サポート」という4つのテーマに則った活動を行っています。

「学びのサポート」を例に挙げると、家庭科で調理実習や裁縫など、体験活動を行う際には、安全面に十分配慮することが必要です。そこで、地域の方々をお願いして、指導の補佐役を担っていただくなど、先生方と子どもたちの双方のサポートにつながる活動を行っています。

漢検への取り組みについて

漢字検定の団体受検（以下、漢検）は、「学びのサポート」の一環として、地域協働学校の準備校に指定された2013年から実施しています。当時の校長先生が国語力向上を目指した取り組みとして漢検実施を希望されたのが導入のきっかけでした。ただ問題はどこが主体となって実施するかでした。学校の授業時間を漢検に割くことは現実的に難しく、かといって、PTAの方々も時間的な余裕がありません。そこで私たち協議会が主体となって実施することになりました。そうすることで、保護者を含

めた地域の方々へのお声がけもしやすいのではないかと、いう思いもありました。

実際に導入したところ、思った以上に好評だったため、翌2014年度からは算数検定、2016年度からは英検Jr.も導入し、現在は1学期に英検Jr.、2学期に算数検定、そして3学期に漢検というスケジュールで行っています。

実施に向けた 準備や運営体制

実施にあたっては、先生方にできるだけ負担をかけないよう、募集活動から準備、実施、結果返却に至るまで協議会のメンバーが中心となって動いています。限られた人数で担当することもあり、学校側とも話し合いながら、よりスムーズに運営できるよう考慮しています。

たとえば「児童からの申し込みの受け付けは、週に2回、授業前に行われる「朝遊び」の時間内に行います。もともと朝遊びの「見守り」も協議会のメンバーが行っているのので、その時間を利用して受付業務を行うのが最も合理的だと考えたからです。また「地域の方々への案内は、学校の外の掲示板に募集チラシを貼り、土曜日の学校公開時を利用して受け付けを行うなど、できるだけ時間や手間が省けるよう工夫しています。」

さらに検定を土曜日の午後に実施しているのは理由があります。ひとつは地域の方々が参加しやすいということ。もうひとつは学校の施設を活用しやすいからです。

このほか、保護者の方の協力は試験監督など一部の役割にとどめ、問題用紙の保管や可否結果など個人情報の管理は私たち協議会のメンバーだけで慎重に行うなど、運営の役割分担にも配慮しています。

漢検の反響

初めて実施した時は、公的なテストの雰囲気慣れていなかったためか、子どもたちがなかなか静かにならず、検定開始時刻が予定よりも遅れてしまったこともありました。けれども、回を重ねるごとに、いい意味での緊張感が教室内に生まれ、子どもたちの表情にも少しずつ真剣さが増していきました。やはり「学校以外のテストを受け、しかも自分の実力が点数や可否となって表れる経験は、子どもたちにとって貴重な財産になっていると感じています。」加えて、算数検定や英検Jr.は子どもが対象なのに対し、漢検の場合は級設定が幅広いので大人も参加しやすいようです。大人と子どもが同じ部屋で受検する場合もあり、これも子どもたちには新鮮だと思います。

また、「保護者の方からも「安心して助かる」という声を多くいただいています。」公開会場では送迎が必要な場合がありますが、通い慣れた小学校でならその必要はありません。保護者の方にとっても大きなメリットだと感じていただけているようです。

あえて改善点を挙げるとするならば、検定結果の活用でしょうか。各家庭で結果を見直して学習に役立てるだけでなく、学校の先生方のご指導にも役立てていただけるかもしれません。より有効に活用することができれば一層、漢検の効果は高まるはずだと考えています。

今後の展望

毎回の受検者はおよそ60名です。申込日や検定当日には先生方も様子を見に来てくださるなど、学校側とも連携を取りながら実施できています。しかし本来は、私たち協議会が子どもたちの支援につながる企画を立案し、その企画に沿う形で地域の方々に活動していただく、というのが理想形だと思っています。今後地域の方々をいかに多く私たちの活動に巻き込んで協力を願うか、それが現時点での最大のテーマです。

まだ地域の方の受検はごくわずかですが、今後は漢検を機に学校に足を運んでくださった地域の方に呼びかけることで、一緒に活動できる仲間を増やせるのではないかと期待しています。学校の先生方は異動がありますが、地域の方は土地に根付いて長いスパンで子どもたちの成長を支えることができます。幅広い年齢の方が受検できる漢検が、地域の活動を活性化する良いきっかけになればと考えています。

本校の恒例行事として定着している漢検は 漢字学習に対する子どもたちの 大きなモチベーションになっています

茨木市立豊川小学校

連携支援教員 ^{きつ たか} 橘高 きみ代 様

本校における 漢検取り組みの位置づけ

本校では「豊かな人権感覚を養うこと」「一人ひとりの学力を保障すること」を教育目標として掲げています。そして学力の向上を図る目的で10年以上にわたって実施しているのが漢字検定の団体受検(以下、漢検)です。漢検を実施するにあたって、本校では保護者を含めた地域の方々にも広く漢検を案内しています。学校の教育活動の一環として実施するからには、その意図や効果を保護者の方にしっかりと理解していただく必要があります。そしてまた、豊川小学校の特色ある取り組みとして、地域の方々にも広く知っていただきたいからです。児童とお父さん、おじいちゃん、という三世代で受検されたケースもありますし、他校の小学生や中学生もこれまで数多く受検しています。

漢検を導入した当初は50名ほどで実施していましたが、回を重ねるごとに受検者の数も増加し、2017年1月に実施した漢検では、約150名の受検者がありました。このうち保護者や地域の方は約20名です。本校の全児童数が約200名であることを考えると校内の参加率は6割以上にのぼります。また、開始当初に比べて低学年の受検者も増え、1年生も積極的に参加しています。漢検が恒例イベントとして児童や保護者に定着しつつあるという確かな手応えを感じています。

全体の合格率も93%で、うち12名が満点合格者となり、漢検の「優秀団体賞」を受賞しました。子どもたちの頑張りに対して、心から褒めてあげたいと思いますし、本校が一丸となって取り組んできたことが、着実に成果となって表れているように思います。

漢検導入の目的

漢検に注目した第一の理由は「誰でも取り組めること」です。漢字の学習は、誰もが取り組みやすく、それでいて丁寧さと反復練習が求められます。子どもたちが目標を持って頑張る習慣づけには最適です。また、頑張った結果が目に見えやすく、子どもたちの自信につながります。「誰にでも取り組めて、自信をつけられる」というのは、本校で重視している自尊感情を育む人権学習にもつながるものがあると思います。

また、本校は通塾率がそう高くなく、子どもたちが公的なテストを受ける機会もほとんどありません。漢検を導入すれば、テストに一生懸命取り組む姿勢も身につくだろうと考えました。検定料がかかるという点では確かに保護者には負担になるのですが、その分真剣な気持ちで勉強し、緊張して検定に臨みます。お金を払って受検しているのだから、最後まで全力で頑張れるし、その結果が点数や可否となって表れ、ひとりひとりの自信につながる。これは検定が有料であることのむしろメリットだと考えています。

ちなみに漢検導入前は、校内の漢字テストの導入も検討していました。しかし、作問や採点の負担が大きいことと、上記のように公的なテストで児童の意欲を高めたいという狙いから、民間の検定を採用することに決めました。



漢検に向けた学習の工夫

本校では、毎年3学期に実施する漢検のスケジュールに合わせ、学年配当漢字の学習は2学期のうちにすべて終え、子どもたちが学年相当級を受検できるよう配慮しています。また冬休みには漢検の過去の問題をピックアップしたプリントを宿題として配布しています。さらに検定日の1週間ほど前には、希望者を対象とした模擬テストを行っています。これは制限時間もきちんと設け、先生が試験監督を行います。模擬テストは希望者のみですが、検定に向けた学習用のプリントなどは検定の申し込みの有無にかかわらず、全校で取り組みます。子どもたちも自主学習をしています。やはり先生のサポートがあるぶん、よりいっそう子どもたちも頑張っているように感じています。

実施に向けた準備や 運営体制について

漢検の準備や運営に関しては、保護者の方々への協力依頼などは行わず、教職員だけで担う体制を整えています。学力保障という部会に所属する先生の中から毎年準備・運営の中心メンバーとなる担当者を選出し、募集から実施、結果配付までを取りまとめます。ただ、先生方は担任でもあり多忙なため、私のような連携支援教員が随所で補佐に入ることによって担当者の負担を軽減しています。

また、保護者の方々への声かけは、ちょうど漢検の募集期間と個人懇談とのタイミングが合致することもあり、担任の先生から各保護者の方へ直接案内しています。その際、「保護者の方も一緒に受検できるんですよ」と

アナウンスを行うので、親子や兄弟など、家族ぐるみで漢検を受検する方も年々増えています。最近では保護者のほうから「今年も漢検やりますよね」と声をかけられることも少なくありません。そういう言葉を聞くたびに、漢検が豊川小学校の恒例イベントとして根づきつつあることを、あらためて実感します。2016年度は親子や兄弟で受検し、合格したグループがなんと31組も出て、それぞれ漢検から「家族合格表彰状」をいただきました。

漢検の効果と今後の展望

漢検の導入以来、漢字に対する子どもたちの意識はずいぶん高くなったように感じています。漢検に向けて勉強するうちに、単に漢字を覚えるだけではなく、反対語や同音異義語など、1つの漢字から派生して他の漢字に興味を持つ児童も増えてきました。また書く文字にしても、「止め、はね、はらい」という基本的な書き方を学んだおかげで、多くの子どもたちが丁寧にきちんと漢字を書くようになりました。そしてそれ以上に大きな成果は、子どもたちに頑張ろうとする心が芽生えたことです。頑張って漢字を勉強しないと合格できない、だから合格をめざして頑張ろうと思う。漢検の存在が子どもたちの漢字学習の大きなモチベーションとなっていることは間違いありません。本校の特色ある取り組みとして定着した漢検を、これからも保護者や地域の方々にも広く呼びかけながら、継続していきたいと考えています。

漢検の受検を契機として 子どもたちがもっと自信を持ち 未来の可能性が広がることを期待しています

登美丘西小学校

学童教室主任

須山 千春 様



学童が子どもたちのために できること

私たち学童は、保護者に代わって子どもたちを預かり、^{しつけ}躾や常識を教えたり、学年の違う子どもたちが一緒にできる勉強や遊びを考え工夫したり、言わば第二の家庭のような役割を担うべく活動しています。例えば、今の保護者の方は大変多忙で、子どもの話をゆっくり聞く時間が取れず、子どもの言動の本質を見抜いて叱る余裕がないという話を聞きます。そこで、学童では指導員が、悪いことは悪いとはっきり言い、毅然とした態度で子どもたちを導きます。保護者からは「いつも丁寧に指導してくれてありがとうございます」と感謝されることもしばしばです。また外で遊べる場所が少ない今の時代にあって、異学年の子や様々な年代の指導員と交流できる学童というのは、子どもたちにとっても得難い居場所になっていると思います。

それから学童は、学校と家庭とをつなぐ役割も果たします。学校の先生と保護者の方がお会いして話す機会は意外なほど少なく、何か起きたときに親御さんにどこまで伝えればいいのか分からないという先生方の悩みの声をよく耳にします。その点、学童を運営する私たちの場合は、迎えにくる保護者の方と毎日のように話すため、しぜんとおよその性格や考え方が把握できるようになります。ですから担任の先生から相談を受けたり、保護者の方から「学校で心配なことがあったので、しばらく様子を見てもらえますか」と頼まれたりするケースも少なくありません。そうした仲介役もまた、私たち学童の指導員の重要な役割であり責務だと考えています。

漢検を導入したきっかけ

このように子どもたちにとって学童は大切な居場所です。第二の家庭として、ただ遊ぶ場というだけではなく、子どもたちの^{しつけ}躾や礼儀の面に気を配ったり、学習習慣の定着を図ったりという役割を果たしていかなければなりません。とくに、子どもたちが興味を持ってくれるものを活動の中にどう取り入れていくか、学習習慣の定着は大きな課題となっています。

そのための試みのひとつとして、数年前から取り組んでいるのが百人一首です。集中力を高める目的で始めたのですが、試行錯誤し、独自の「級」や「段」の検定制度を設けるなどの工夫を重ね、いまでは小学1年生からチャレンジしてくれるまでに定着しつつあります。

この百人一首に、何かプラスアルファできるような取り組みはないだろうか。そう考えていた折に、教頭先生が漢字検定の団体受検（以下、漢検）のことを教えてくださいました。教頭先生は、学童に通う児童が百人一首の句をスラスラと暗唱するのに驚き「よく覚えたね。それなら漢検でも級を取れるかもしれないね」と勧めてくださったんです。学校としても漢検には前々から興味を持ち、資料も取り寄せていたのだけれど、さまざまな事情で実現には至っていないことがわかりました。そこで先生と相談し、学童の活動の一環として漢検を実施することになりました。学童が継続してきた百人一首という活動と学校との意向とがマッチして漢検導入が決まったわけで、学校と相談して良かったなと思っています。

学童で漢検を実施する意義

教頭先生のお話がきっかけで導入を決めた漢検ですが、ぜひ取り入れたいと考えた理由のひとつは、子どもたちに自信をつけさせたい、ということです。もう卒業しましたが、口より先に手が出るようなやんちゃな子がいて、でも彼が授業の百人一首でトップの点数を取り、じつに嬉しそうに自慢していた時の表情をいまでも忘れません。そんなふうに、何らかの成果が出ると自信が生まれ、また新たな目標に向けて頑張ろうと思う。単にプリントをこなすだけではなく、やはり合格して賞状をもらってほめられるということが大きいと思うんです。ですから今回の漢検においても、まずは合格することを第一に考え、自分の力に応じた級から受検するように勧めています。合格して、ひとり一人が自信をつけてほしいと思います。

もうひとつの理由は、国語力の向上です。残念ながら、いまの子どもたちは真剣に言葉や漢字というものに向き合う機会が少ないように思います。私の子ども時代と違って、辞書を引くことも少なくなっているからか、言葉の大切さや、日本語の美しさというものに、気付いていないのかもしれませんが。漢検を受検しようと思えば、辞書を引く機会は増えるはずですし、たとえば自分の名前の漢字を辞書で引いて意味を知ったら、自分の両親がどういう思いをその漢字に託してくれたのか、その有り難みが理解できるはずです。そういう経験が漢字そして日本語に興味を持つきっかけとなり、学ぶ楽しさにつながれば、もっといろんな漢字を覚えたいという意欲もおのずと湧いてくるでしょう。やはり日本人にとって国語力というのは、単なる一教科の学力ではなく、すべての教科の学力向上につながるものだと思います。

漢検の導入を機に、子どもたちが漢字の面白さと重要性に目覚め、さらに合格することで自信を深めてくれるよう心から願っています。

今後の展望

とにかく初めての試みですので、現時点では来年（2018年）1月に実施する漢検を無事に終えられることが目標です。学童の保護者の方々からは「ぜひ受けさせたい」といった予想以上の大きな反響を頂いているので、いずれは学童だけでなく、学校全体に幅を広げた取り組みにしていければいいなと考えています。

漢検に向けた準備についても、プリント学習だけではなく、たとえば漢検が紹介してくれる「漢字教育サポーター」の出張講義を活用して漢字の成り立ちや意味などを楽しく学ばせるなど、まずは子どもたちが漢字への興味を持ってくれるような取り組みを企画したいです。

それから、これは学童を長く担当していて感じるのですが、目の前のことしか見えていない子があまりに多いように思います。私は事あるごとに「あなたたちにはもっといろんな可能性があり、もっと素晴らしい未来が待っている。そのためにも勉強が必要で、とくに日本人である以上、漢字はちゃんと学んでおこうね。」ということを繰り返し伝えています。学ぶことの意義と楽しさを知って前向きに勉強すること、それは自分自身の未来につながるものなんだという考え方を身につけてほしい。漢検の受検が、子どもたちのそうした意識づけの契機となってくれることを期待したいですね。



子どもたちが課題を見つけて達成するための 効果的なコンテンツとして 漢検を導入

堺市立福泉上小学校

地域コーディネーター

学校長

教頭

花田 尚実 様

加茂 嘉彦 先生

丹後 靖史 先生



(左から花田様、丹後先生、加茂先生)

本校の教育理念と 重点活動

加茂 本校は「文武両道」と「思いやり、優しさ」をキーワードとしながら「知徳体」の追求を教育理念の柱としています。高校レベルで「文武両道」を謳う学校はあるでしょうが、小学校では希少かもしれません。将来、子どもたちが社会に出れば、自分で課題を見つけてそれを乗り越える力が必要です。「勉強と運動をしっかりやる」という基礎を小学生のあいだに身につけておくことが、そうした力のベースになると考え、あえて小学校から「文武両道」を唱えています。

本校が重視する 地域との連携関係

加茂 教育理念の浸透とともに、本学が力を注いでいるのは、地域との密な関係づくりです。一般に学校教育というと、学校と家庭との関係のみで考えられがちですが、だんじり祭が盛んで情熱的な文化風土が根付いている堺市では、地域の方々の支えなくして理想の教育活動は実践できません。その点、本校はコーディネーターの花田さんをはじめとする地域の皆さんと、熱い志をひとつにした、理想的な連携関係が築けているものと自負しています。

花田 私は昼間は図書館サポーターとして勤務し、放課後は子どもたちに勉強を教える「マイスタディ」という堺市独自の活動のスタッフとして学校に関らせていただいています。本当に学校と地域とがいい形で連携できていると思います。私自身、外を歩いていて朝礼の音が聞こえてきただけで嬉しくなりますし、一緒に活動しているスタッフは皆学校を愛する気持ちが強いように感じます。

漢検導入の経緯

加茂 私は勉強も運動も市内でナンバー1の学校にしたいという熱い思いで学校経営を行っています。その思いが若い先生方に伝わって、さらにやる気のある先生の姿を見ながら、子どもたちも頑張ろうと思う。そんなポジティブな連鎖を期待しています。本校はもともと運動は盛んでしたが、その半面、勉強はまだまだこれからという面がありました。しかし最近では先生方の努力のおかげで授業での集中力も少しずつ高まり、学力も右上がりになりつつあります。これを継続しステップアップしてゆくには何が必要かという、やはり家庭での自学自習に尽きるのです。ところが、家庭で具体的に何に取り組めばよいかかわらず、結局宿題だけで終わってしまうことが多いのが課題でした。そこで自学自習の充実を図るために決定したのが、漢字検定の団体受検（以下、漢検）の導入でした。漢検というコンテンツが新たに加わるにより「自分で」課題を見つけて達成するという習慣が定着化できるのではないかと考えました。

漢検導入の意義と期待

花田 これは保護者の立場からの意見ですが、漢検の場合、子どもたちがチャレンジする課題や目標がきちんと設けられていて、ひとつクリアするごとにまた次の目標を立てることができる仕組みになっている点が素晴らしいと思います。将来子どもたちが成長した時、小学生の頃に何かひとつのことに熱心に取り組んでクリアした経験があるかどうかは、有形無形の差となって表われるような気がします。そして、子どもだけでなく親も受検できる点もよいと思います。子どもに「勉強しなさい」と

いくら口酸っぱく言っても耳を貸してくれませんが、漢字の勉強をしている親の背中を目にしたら子どももおのずと勉強する気が湧くでしょう。実際、わが家でもそのような効果が出始めています。また勉強の面だけでなく、漢字の話をきっかけに会話の時間が増えたことも「漢検効果」のひとつです。今回は全校児童の1/4にもあたる約100名もの受検申し込みがあったそうなのですが、地域の集まりの中でも「何級を受けようか」などと漢検の話題が多く飛び交い、関心と期待感の高さを実感しています。

丹後 親子で一緒に勉強する時間を共有することで、いずれ子どもたちが親になった時、それが当たり前の習慣として受け継がれていきます。長期的な視野に立って考えた場合、そのような好循環を育てていくことが地域の教育力のレベルアップにつながると考えています。

実施に向けた準備について

花田 初めての試みということもあり、自分自身がどのように関わればよいのか最初は不安でしたが、漢検のWebサイトをみると、スケジュールや対応の流れなどが動画で解説されていて、初心者の方でもスムーズに理解でき、当初の不安は一掃されました。事前準備や会場設営は、マイスタディのスタッフを中心にサポートする予定ですが、学校側が主体となって企画し、教室を会場として開催することは大きな意味があると感じます。保護者からではなく、学校側から意義や効果を伝えていただいたからこそ、子どもたちも納得して前向きに受け入れてくれたのではないのでしょうか。学校がこれだけ一生懸命に考えて新しい試みに挑もうとしていることが嬉しく、私自身もできる限りの力添えをしたいと心から思っています。

今後の目標

丹後 合格率など具体的な数字目標は考えていません。あえて目標をひとつ挙げるとしたら、家庭での自学自習の定着率の向上でしょうか。今朝の朝礼でも子どもたちに伝えたのですが、毎日2時間をゲームやテレビに費やしたとしたら、小学校の4教科の年間授業時数を上回ることになるのです。その時間を自学自習に充てる子どもたちが増えればよいと考えています。少なくとも、漢検の導入によって放課後の自学自習の選択肢が増えるわけで、その意味は決して小さくないと思います。一人ひとりの子どもが自己実現のための努力や工夫を重ね、さまざまな課題を乗り越えていける人間に育ってくれるよう願っています。

漢検は 子どもたちがもっと輝き、 自信を深める格好の契機

地域コーディネーター 「武庫の里」の活動計画

尼崎市の小学校では、2016年度から地域学校協働活動が始まりました。私は「学校」「地域」「家庭」を結ぶコーディネーターとして、担当小学校区の事業計画を立案しています。今年度から来年度にかけては「将来の万ーのために」「明日の自分のために」という2つのテーマを掲げています。前者は、万ーの際に備えて安心・安全を確保する「防災計画」で、今春新たに設立された地区会館を地域のメイン防災拠点として活用できるよう、子どもたちに紹介するイベントを開催しています。そして後者のテーマは、子どもたちの支援を第一義としたものです。どのような計画がふさわしいのか検討を重ね、今春に初めて漢字検定の団体受検（以下、漢検）を導入しました。結果、少なからぬ手応えと評価を得ましたので、今後も漢検を継続することに決めました。



漢検導入の経緯

子どもたちのために何ができるか、子どもたちの心が元気で前向きになるためにはどのような力添えをすべきなのかということを、学校や行政の関係者と度々話すことがあるのですが、たとえばお祭りのようなイベントを企画したとしても、一発花火と言えど語弊があるでしょうが、一過性の感動や楽しさの提供に終わりがねえせん。それよりも継続性があって、結果が目に見えるような形

で子どもの成長や支援につながる活動はないものかと模索していました。そこに、漢検の資料を目にした学校関係者の方が私に内容を伝えてくれました。私も資料に目を通したところ、**実施の流れはほぼ確立されていますし、準備や当日のサポートに携わる人材さえ確保できれば実施できそうだと感じました。そこで事前に保護者にアンケートをとったところ、受検希望も多く、ボランティアに協力するというお声もたくさん上がりました。**やはり漢字というのは学力の基本となるもので、しかも漢検なら結果がはっきりと出ますよね。これなら保護者の方にも協力を依頼しやすいと思いました。

漢検導入の目的と期待

誰でも得意なことは好きになり、頑張ろうとします。ただ子どもたちの場合、心から「頑張りたい」と思えるものに出会えていないケースも少なくありません。私個人としては、こうした子どもたちが活躍できるフィールドを用意することが、漢検導入の目的であり、最も期待するところでした。

子どもたちの場合、たまたま出会ったものが妙にはまって自分の得意分野になったり、友だちにつられてやってみたら友だちよりずっと本気になってしまったり、といったことだってありえます。どこに興味関心のスイッチがあるかわからないから、そのスイッチが入る可能性があるような機会は多ければ多いほどよいと思うのです。漢検を受けることで、そのスイッチが入る子どももいるのではないかと考えています。

また、日頃の漢字の勉強だけでは、自分の漢字の力がどのくらいのレベルなのか測る術があまりなく、モチベーションが上がりにくいものです。その意味でも「自分の到達点」が確認できる漢検の意義は非常に大きく、今春受検した子どもたちや保護者の方々も、現在の漢字の実力を測りたいという思いが、最初の動機づけになったのではないのでしょうか。それともうひとつ、子どもたちの試験

慣れを促すというねらいもありました。学校のテストとは異なる雰囲気、集中して解答を書き込んでいく。緊張感の中で受検する漢検は、今後の高校受験や大学受験などで普段の実力を発揮できるようにする上で、貴重な体験だと思います。

実施に向けた準備や 運営管理について

漢検を実施するには、多くの人々の協力が欠かせません。前回の実施では、先生方には、いちばん掲示物の少ない教室を貸していただきました。会場設営の準備や検定料の集金、当日は受付や試験監督に関しては、保護者のボランティアの方に協力をいただき、本当に頭の下がる思いでした。私どもとしても、「午後の2時から4時までだけお願いします」といったように、ひとりずつの拘束時間をあらかじめ短めに設定するなど、**保護者の方々ができるだけ関わりやすいような仕組みを工夫したつもりです。**それにしても何のトラブルもなく漢検を実施できたのは、学校側の協力もさることながら、ボランティアスタッフの力に負うところが大きかったとあらためて感謝しています。

漢検の反響と成果

実施後、漢検に対して特に評価したいと思ったのは、検定結果の仔細な分析を行ってもらえたことです。教育の活性化には、民間の力をうまく活用することも有効だと気づかされました。また、漢検の評価を知るため、**実施後に子どもたちと保護者の方々にアンケートを取ったのですが、9割近い方が「参加して良かった」「次回もぜひ参加したい」と答えています。**子どもたちにとって先生以外の大人が試験監督を担当するのは新鮮な経験だったでしょうし、保護者にとっても子どもたちのこんなに真剣な表情を目撃するのはおそらく初めてのことだったは

尼崎市立武庫の里小学校
地域コーディネーター
高野 充樹 様



ずで、親子ともお互いの新たな一面を発見する機会になったのではないのでしょうか。あまり勉強しなかったのに合格したという子どもの声も耳にしましたが、プロセスはともあれ、合格して嬉しかったことは間違いなく、まして表彰を受けた子どもたちの感じた喜びと自信は、言葉では表現できないほど大きな財産になったことでしょう。子どもたちが褒められ、認められる機会が作れて嬉しく思いました。そして漢検を受検したことで、**子どもたちにはいろんな変化が出てきたように思います。悔しい成績に終わりリベンジに燃える子もいるでしょうし、学校の授業の姿勢が変わったという声も聞きます。私が期待した通り、子どもたちが活躍できるフィールドをひとつ用意できたと考えています。**



今後の取り組みの 展望とビジョン

次回の実施に向けて、より多くの子どもたちが自信と輝きを増すために、2つの取り組みを考えています。ひとつめは、子どもたちや保護者の希望に応じて、地域の図書館に漢検のコーナーを設置することです。これは実現に向けて進んでいます。ふたつめは、子どもたちの保護者や兄弟姉妹も一緒に受検できる仕組みづくりをしていきたいということです。多くの方に学びと、自信をつける機会を提供するために、いずれは地域全体にまで広げたいという話もでています。こうした取り組みによって漢検への関心がさらに高まり、全体の学力の底上げに寄与できればと期待しています。

漢検は子どもたちの学習支援にとどまらず いまや地域の教育活動として 定着しつつあります

富雄中学校区地域教育協議会

会長

上城戸 様

総合コーディネーター

新谷 様

地域コーディネーター

加藤 様

山上 様



漢検実施2年目の手応え

新谷 昨年度(2016年度)の冬に実施した漢字検定団体受検(以下、漢検)に続いて、今年度の10月には2回目の漢検実施を予定しています。昨年度は小中学校の児童・生徒を対象とした募集でしたが、今年度は地域全体の教育活動として保護者の方や高校生、高齢者の方まで広く募集告知を行いました。手応えはあったのですが、いざ申込日が近づいてくると、どのくらいの参加があるのか不安と期待が入り混じり、ドキドキして当日を迎えました。そうしたら驚いたことに、真っ先にお見えになったのは78歳の女性でした。「開始時間前から学校の前で待っていたんですよ」と言いながら嬉しそうに申込手続きをされました。その姿を見ていると緊張していた気持ちがずっと緩んで、実施して良かったと心から思いましたね。最終的には小中学生から高齢者まで幅広い層の受検申し込みがあり、漢検が地域全体の教育活動として認知・浸透しつつあることを実感しました。

地域教育協議会の活動

新谷 私ども富雄中学校区地域教育協議会では、地域と学校の橋渡しをしつつ、子どもの教育のために役立つ活動を行っています。もともとは文部科学省の委託事業を担うために発足した組織で、5年前には富雄中学校の生徒たちが地元の米を使ったお菓子作りに挑む「富より団子」というプロジェクトにも関わりました。現在は放課後の学習支援、環境整備、部活動支援を活動の三本柱と位置づけています。その学習支援の一環として数年前より数学の講座を実施していたのですが、より多くの子どもたちに学習できる機会を広げようということで「漢

字チャレンジ講座」をスタートさせました。生徒の不得意な科目に焦点を当てた学習支援だけでなく、得意な分野をさらに伸ばすような学習支援があってもいいのではと考えてのことです。

1年目、初めての漢検で 得られたこと

新谷 漢検導入のきっかけは、漢検より届いた案内資料でした。資料を見たときに「子どもたちの日頃の努力が形になるような機会が作れそうだ」と感じました。普段の試験や模試と違って、努力した分だけ合格に近付き、合格者全員に賞状が届く漢検は、子どもたちの大きな自信になると思います。また、中学校だけでなく地域全体を対象として広げていったときに、漢字であれば、年齢にかかわらず誰もが自分の力に合わせて楽しく取り組めるのではないかと考えました。

加藤 私にとっては地域の公立学校を会場に受検できるという点が最大の魅力でしたね。個人で申し込んで県内の公開会場まで出向いて受検するのは、休日に一日がかりになりますので、通いなれた学校で受検ができれば喜ばれるだろうと考えました。それと英語よりも漢字のほうが幅広い世代の方に受け入れてもらえるだろうという思いもありました。

新谷 1年目は富雄中学校と2つの小学校を対象に告知し、会場は中学校の2教室で行いました。60名の受検者に対し、中学校の地域コーディネーター4名で準備・運営を担当したので大変ではありましたが、それ以上に得たものが大きく、何よりも、子どもたちの真剣な表情を目の当たりにできた経験はすばらしい財産になりました。たとえば小学生の受検者など、中学校の校門をくぐるだけでも緊張するだろうに、身長に合わない中学

校の椅子に座って必死に問題を解いているわけです。そんな姿を見ていると本当に涙が出そうになりましたね。ほかにも、3級受検のお父さんと5級受検の小学生の娘さんが、たまたま同じ教室で受検することになり、娘さんが父親の背中を見ながら受検している姿も印象的でした。また、会場となった富雄中学校を卒業した高校生が「懐かしい」と言いながら受検に参加してくれたり、体調不良を訴えてひとりだけ保健室で受検した子どもが見事合格したり…。漢検に取り組むひとりひとりの子どもたちの姿・エピソードが漢検を続けていく最大の原動力となっていますね。

2年目、地域全体の 教育活動に向けて

新谷 そして今年度(2017年度)、2回目の漢検に向けて、小中学校の校長・教頭先生、自治連合会の会長さん、PTA関係者らを交えて、より多くの地域住民の方に参加していただくために何度も意見を交わしました。自治連合会の会長さんからは回覧板で知らせてはどうか、という有り難い申し出をいただきました。また、地域の銀行や郵便局に案内用紙を置かせてもらったらどうかという意見も出ました。銀行は、たまたま私自身が春に職場体験への協力を依頼した経緯があり、支店長さんとも面識があったんです。その繋がりを元に銀行に「案内用紙を置かせてください」とお願いしたところ快く応じてくださり、公民館や郵便局にも設置していただける運びとなりました。先日、銀行と郵便局に案内用紙の残りを回収に伺ったのですが、ほとんど残っておらず、予想以上に多くの方々が用紙を手にとってくださったのかと思うと嬉しくなりました。今回幅広い層の受検者に参加していただいたのは、地域全体で教育活動を盛り上げたいという思いのもと、地域一体となつての募集告知活動を行ったことが実を結んだのではないかと考えています。

今後の展望

新谷 漢検はもちろん今後も継続して実施し、通期のイベントとして、より一層の定着を図っていきたいと考えています。加えて、いま温めているのは、日本漢字能力検定協会さんに教えていただいた「漢字教育サポーター」の出張講座を地域の公民館を利用して開催するプランです。この「漢字教育サポーター」や漢検の活用によって、「漢字」をキーワードとした地域の方同士のコミュニケーションが深まるなど、嬉しい連鎖が生まれてゆくのではないかと期待しています。もっと言えば、より多くの住民の方々が漢検に参加されることで、地域全体の教育活動の活性化にも繋がると考えています。日程調整など実現に向けた課題も山積していますが、いずれは叶えたいと地域コーディネーター全員で夢を膨らませています。



児童・保護者・地域の方々の 学びを育み、学校が活気づく 漢検はまさに“一石四鳥”の学習支援活動です

下関市立熊野小学校

教頭

船木 美弘 先生



本校の教育理念と重点活動

本校は「日本一学びが好きな学校」を学校目標に掲げています。学習力・授業力・組織力の向上をめざしながら魅力と活力にあふれる学校づくりを推進しており、その一環として「地域とともにある学校」をめざしたコミュニティ・スクールを導入しています。これは学校と地域、家庭が連携し、協力して子どもたちの成長を支える学習支援の充実に向けた取り組みです。具体的な活動としては、大学生のボランティアに子どもたちの学習指導をお願いしたり、地域の方に授業の補助に入ってもらったり、地域の方を招いて詩の朗読会を開催したりと、さまざまな試みを実践してきました。

しかし、単に地域の方に「学校に来て学習支援をしてください」とお願いしても、すぐには協力を得られません。まずは学校に足を運んでもらって学校の様子や子どもたちの頑張っている姿を見ていただくところから始めなければいけないと気づき、「大人の学び場」と称して地域の方を対象としたフラワーアレンジメント教室や英会話教室・韓国語教室などを企画・開催しました。その結果「学校も楽しいことをやってくれるのですね」と好評で、学校をより身近に感じていただくことができたと感じています。一方で、やはりこうした講座は開催の規模によって参加者が限定され固定化してしまいます。さらに裾野を広げ、性別や年代を問わず誰もが学校に来やすいイベントを実施したいと思案していたところ、漢字検定の団体受検（以下、漢検）に取り組み、保護者や地域の方にも参加を募るというアイデアが出てきました。



漢検導入の経緯

そもそも、漢検の導入を検討した大きな狙いは、児童の学力向上を図るためです。学校と保護者の共通の認識として、学校以外の場所での学習機会が少ないことが課題に上がっていました。そこでPTA役員の会合の際に、いろいろな活動の選択肢のひとつとして、漢検の導入を提案してみました。すると、「漢検は子どもたちの学習習慣の定着や学力向上に最適だと思う」といった賛同の意見がほとんどで、予想を上回る関心と認知度の高さに驚かされました。また、保護者からも受検したいという声があり、「学校でそうした機会を作っていただけるなら」と歓迎の言葉を多くいただきました。そこで、年齢や実力に応じて挑戦できる漢検であれば「大人の学び場」の新たなイベントとして、保護者や地域の方も学校で子どもたちと一緒に学ぶきっかけになるのではないかと考えました。最終的に、保護者の方々の強い要望に後押しされるようなかたちで漢検の導入が実現しました。

申し込みから実施までの 運営体制

募集にあたっては、まず学校で申込用のパンフレットを全校児童に配布し、申込受付も校内で行いました。同時に、校外の方が受検を希望する場合は、事務室に申込用紙を取りに来てもらうようにアナウンスをしました。実際に募集を始めたときは、はたしてどれだけ集まるか心配でしたが、年度途中の10月の検定日だったにもかかわらず89名もの希望者がありました。児童以外にも、保護者や兄弟も含めた地域の方も12名が申し込んでくださり、非常にうれしく思いました。受検申し込みの手続きや検定料の確認などの業務は、

学校側の負担をできるだけ減らすため、取次業者による代行を活用しました。また、検定日当日の運営は基本的に教員が担いましたが、座席案内などは保護者の方も快く手伝ってくださり、大変スムーズに実施できたと感じています。実は私自身、前任校で漢検運営の経験がありましたので、たとえば同じ級の受検者が隣同士にならないよう、あらかじめ番号をふって席次を決めておくなど、その時のノウハウや工夫が活かされたことも大きかったと思います。

漢検に対する反響と手応え

漢検を実施して一番良かったと思うのは、子どもたちひとり一人が受検する級を選び、自分で目標を設定して漢字学習に取り組む姿勢が生まれたことです。実際に多くの子どもたちから「夏休みに漢検合格に向けて勉強を頑張ったよ」という声を耳にしました。「子どもが自主的に学習するようになった」と喜ぶ保護者の方も少なくありませんでした。可否結果に関する問い合わせも多く、やはり自分の頑張りが結果として表れることは、子どもたちにとって大きな励みになることを確信しました。今回の取り組みで自分なりの手応えを感じた子も数多くいたでしょう。そうしたことが新たな学習意欲につながってゆくのではないかと楽しみにしています。また、日頃の漢字テストとは一味違う検定試験に臨むという緊張感は、子どもたちにとって得難い経験となったに違いありません。保護者の方にとっては、通い慣れた学校で受検させることができる安心感も大きいと伺っています。実施後、保護者や地域の方の間でも、漢検の評判がクチコミで広がっているようで、次回の漢検にはぜひ挑戦してみたいといった反応が次々と届いています。当初の思惑通り、これからいろいろな方の来校を促し、学校を身近に感じ、子どもたちの頑張る姿と一緒に見

守ってもらうことができそうなので、今後もこの活動に大きな期待を寄せています。子どもたちは漢字の読み書きが身につく、保護者は勉強する子どもの姿に喜び、地域の方の学ぶきっかけとなり、そして学校は子どもたちや保護者・地域の方に感謝していただける。お世辞でも何でもなく、漢検は、まさに“一石四鳥”の効果を実現できる、きわめて有意義な学習支援活動だと実感しています。

今後の展望

「地域とともにある学校」というコミュニティ・スクールのテーマを考えた場合、その中核を担うのは、学校です。それだけに学校としても、どういう狙いでその活動を推進しているのかという明確な目的を持ち、それを児童や保護者、地域の方に理解していただきながら企画・運営を行っていくことが大切だと考えています。漢検についても同じで、本校としては子どもたちの学力向上とともに、「大人の学び場」の活性化をめざして導入を決めたわけですから。今後どんどん地域の方の受検も拡大し、多くの方に学校へ足を運んでいただくことでさらなる学習支援につながっていくよう、取り組みを継続していきたいと考えています。

幅広い級設定のある漢検は、誰でも自分の力に応じた級を受検し、一歩ずつステップアップしていくことができます。その魅力は年齢を問わず生涯学習に役立てていただけたところです。そして、前向きに学ぶ大人の姿を見て、子どもたちも大人への憧れや、大きくなってずっと学び続ける姿勢を間近で感じることができます。「学習支援」「開かれた学びの場」という本校の狙いをしっかりと貫きつつ、今後は年3回のペースで漢検を実施していきたいと、意気込みを新たにしています。

地域に開かれたコミュニティ・スクールとして 小中連携で体系的な学力向上を図るために 漢検を実施しています

太宰府市立学業院中学校

教諭 コミュニティ・スクール 漢字検定担当

中島 善彦 先生



コミュニティ・スクール としての活動

本校は、学問の地として知られる太宰府でも最も長い歴史を持つ学校です。2017年度で創立71周年を迎え、これまで約2万人の卒業生を輩出してきました。太宰府市は、研究授業を小中合同で行うなど、もともと小中学校の交流を積極的に行ってきたエリアです。ここ数年、さらに地域全体として学力向上を図っていこうという機運が高まっており、これまでの学校間の交流で培われたノウハウを活かした小中連携によるコミュニティ・スクールの活動を、全市的に推進しています。

そうした流れを受け、本校も2015年度よりコミュニティ・スクールとしての歩みを開始しました。コミュニティ・スクールの柱となる教育方針は「小中一貫した体系的な学習」です。学区内の小学校とこれまで以上に密な連携を図り、小中の9年間を統合的に捉えた教育活動を推進していきたいと考えています。そして保護者の方を含めた地域の人々に支えていただきながら「地域を愛し、地域に愛され、地域に貢献できる生徒の育成」をめざしています。

漢検を導入した経緯

本校ではコミュニティ・スクールに指定される以前から私たち国語科の教師が主体となって漢字検定の団体受検（以下、漢検）を実施していました。やはり、漢字の問題は高校入試で必ず出題されますし、合格すると資格として調査書に記載できるといった現実的なメリットもあるからです。また、生徒の学力向上を図る上での意義も少なくありません。漢字を含めた国語力というのは学力の基本となるもので、他教科の理解力にも深く関わってきます。学習面でもそれ以外でも、様々な局面において言葉の知

識は必要になります。国語教員として、子どもたちには言葉を正しく使う力を身につけてほしいですし、言葉を大切にしてほしいと考えています。

こうした考えのもと、コミュニティ・スクールとしての新たな取り組みを検討する際も、漢検が最も導入しやすく、効果も高いのではないかと提案しました。年齢を問わず受検できる漢検なら、小学校や保護者の方にも広く参加を呼びかけることができ、地域に広く開かれた教育活動というコミュニティ・スクールの理念とも合致します。結果として、2016年度より本格的に小学生まで募集対象を広げる形で漢検を実施することができました。2017年度も6月、10月、翌年1月の3回にわたって漢検を実施する予定を組んでいます。

実施に向けた 準備や指導について

漢検を実施するにあたって、申し込みの手続きや会場設営といった実務的な部分は本校が主体となって担っています。まず、本校の生徒と学区内の小学校に配布するための受検案内（児童・生徒用パンフレット）を漢字検定協会（以下、協会）から取り寄せます。次に、この受検案内を小学校にお渡しして希望者を募ってもらい、教務の先生が取りまとめてくださったものを本校がお預かりします。そして、本校が窓口となって、一括して協会に申し込みます。

学習面では、多くの生徒が漢字の学習に取り組めるよう本校の図書館に漢検の書籍を置き、小学校へは漢検の過去の問題を提供するなど、受検のサポートも行っています。

受検級については、本校の生徒には中学3年生で3級、2年生は4級、1年生は5級という目安を提示しますが、あくまで決めるのは生徒です。自信がなければもちろん下位の級から受けますし、漢字が得意な生徒はさらに上の級を受検します。協会が提供する無料教材「目安級診

断プリント」も参考に、目標級にこだわるよりは、自分の能力に応じた級に向けて努力することが大切だと考えています。

漢検導入によって感じるのは、漢検への挑戦が生徒たちの自主的な学びを促していることです。自分でテキストを購入して休み時間に漢字の勉強をしている生徒を見かけることも少なくありません。やはり具体的な目標があると「合格したい」という気持が芽生えるようです。そうした「漢検効果」が校内にもっと広がっていくことを期待しています。

漢検を実施したことによる成果

漢検実施による第一の成果は「小中一貫した体系的な学習」に寄与していることです。小学校6年生で漢検を受検した児童の多くが、翌年は本校に入学して受検するため、小中を通じて漢検という同じ指標を持ち、体系的に漢字を学べていると感じます。小中の学びに繋がりを持たせ、学力の向上を図るという本校のコミュニティ・スクールの目的に照らし合せた際に、非常に有意義だと考えています。小学校の広報誌にも漢検受検の記事が掲載されていて、漢検が小中連携の重要な試みとして位置づけられているのだなと嬉しく思いました。

第二の成果は小学生と保護者が受検を機に本校に足を運ぶ機会が増えたことです。受検当日は小学生の保護者の方のための控え室を用意しているのですが、児童が検定を受けている時間を有効利用して、保護者の方が自由に校舎を見て回れるようにしています。そうすることで入学前に中学校の雰囲気を知ってもらうことができますし、中学校に対しより親近感を持っていただくことにつながります。

第三の成果は、児童・生徒の保護者を中心として、地域の方々の幅広い参加につながっていることです。兄弟や家族で受検する方もいますし、生徒の祖父母が受検するこ

ともあります。漢検の受検をきっかけとして、地域のさまざまな方が本校に興味と関心を持ち、ひいては地域の教育活動そのものを考え、支援してくださるようになれば、それはコミュニティ・スクールとして大変ありがたいことだと考えています。

今後の展望

過去、中学生だけで受検していた際には金曜日の放課後に漢検を実施していたのですが、保護者や地域の方々の参加が増えたこともあって土曜日の実施に変更しました。以前に公開会場で漢検を受検された方などからは「近所の中学校で受検できて助かる」という感謝の声もいただいています。コミュニティ・スクールの取り組みの一環として漢検を実施する限りは、これからも地域に愛され親しまれるイベントとして広く定着させていきたいと考えています。

今後の課題として、参加者をさらに増やしていくことも大切ではあるのですが、それとともに、より効果的な学力向上のための試みも取り入れていきたいと考えています。たとえば太宰府市の小学校では、地域コーディネーターの方が学習支援活動として、子どもたちのプリントの丸つけを行っています。そのような事例をヒントに、今後は協会にもらった「漢字学習プリント」などを活用して漢字指導を行うなど、より体系的な学習支援を実践していければと考えています。

